湖月抄

うきふね

30

8.23
M8K5

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

蛍 并三 細 巻名以詞并歌号之 云々 胡抄 蛍とうをと
ささゝこふとしの夕つくいとゆかしくつゝみて 奇に向ひ 姿ハそれと身
とのこころに蛍をそいふなりまたおもひよりめ 花鳥
水らの五月の事也 又明星の并く 細孟曉同 愚按 彼一
説のことくなるへしハ水のあはれ

今はかくおもおもしきほとによろつのと
やかにおほししつめたる御ありさまなれはた
のみきこえさせ給へる人々さまさまにつけ
てみな思ふさまにさたまりたゝよはしから
てあらまほしくて過し給ふ 対の姫君こそ
いといとおしく思ひの外なる思ひそひて
いかにせんとおほしみたるめれ かの監か
うかりしさまにはなすらふへきけはひならねと
かゝるすちにかけても人の思ひよりきこゆ
へきことならねは心ひとつにおほしつゝ
さまことにうとましとおほす

今はかくおもおもしき
細 第一年に源の上ハ極めて尊く
絶えさせ給はで、心にかゝり給ふ
といふ也 されとも御大
臣より朝家に 重
親く天下をもしろしめす也 孟源
つかさ天下政をとりて源
まつりごとの中にて
ふかく
それよりさき 細 六条院
院のおほせのゆゑに源の光
ようやくおもりにけれ
みな人のおもひ
より孟も人の様く
つけて大かたのことゝさま
にてもしまして宮は
玉の姫君をこそ 細 玉鬘
まうけ源を我妹内に
心をよせまうける事の心
あるましく
思ひよりく 細 源と夫
監をものおもしろき

こゝは八月けしきどもかやうの所々さまとく
かくのさまによ　細 実の源乃御まゝにいとひしうつしとおもふ之
と侮てしもまうしくもしく
さかりてうつりそへて玉のかげなく
　孟 大夫監が云ひの事ゝはるゝ侮よゝ源の心をうちあかすへし侮
　細 おもくくの年ゝこゝにおもゝろ都よ及びしまうとこ之
　細 夕貝の母之
　夕貝を世をすぐべくハおもひじとおもふて
　源氏之
　孟 源のむハ細ゝこゝに世給之
思くもあらいでそれ
細 大田の松乃なげき恋の
色によみしらり 御むかし
らん源の思どうら 懸ふ
て侮いとく
たまきとをおもふことよ
かまへまた和歌 おきて
いかにも不思議

え給ゐするよこしくどうと思しうられよ
よひうれどもよぶ侮うぶ侮よ思しお
つめつゝ母君のゆくへをもしらのまよけるにはれ
しさうも、すまゐとりの人しおしくうすしく
ゆかりも、おもしをもうらいでてまかまで八中く
らうしく身がらをも人めをもそぐう給て
なされることもえ思しおもしれ、うる
しうも数ならまくよ志げくきこゆり
給つゝおもて人の人とそくのどやうなかれ
さへじうすへしうるばをゆめし給ぐとと

くゞやうまゝしなすく
細 人がらとそひ給ふと
むかしのおい 程とうくきき
おもひ給ふ
まうつりよ　河 三ノ弄 細 中之
やうよ人おもひ不義なと
花日
まめにまことしうして
細 おもくの心うくし
こゝしおつとめおい
さやうつくしうらとく
無心のえぬなど
孟 むかしつると先途と云
と申しまつく
八月毎まなりゆり　宅へ
細 八月まハ八人へよおいぶう然
とくつりおもひといひて 其事
花 なまよえてよりもむよふ　花 信明
集 衆代うりてもよう 其事
すゝみ八月毎のこゝすくまゝ
とぶらうりまうれ 盛明
親王集 ハ思ひつゝも形ゆ
八日ハおもりよくも八月まよ
さえ如よるうる 今集 云

よしめつかれつけぶやうよもらしうすくき
こゝ面べきかはおしくゆばくべしうねさ侮
よりそなしうくしおふ人ぶ侮のまうくう
にかうらくりのしまへでいうくかめでら
もうらかし給へども給かりしくおいさ
 孟 女の許之
 との事よ一千し
そうつきさうけもへのことえて侮つて
無心の心などハやうよをめこと
え給ゆうふの給いうくどらくうらぬり
 細 無心
八月面まなりぬうれへと思すてとこ
 侮らの女之
しうらうき給どうまゆうし給らび思ふ
ことも、うつしはなかうそしうれとき
 源氏 無心の文之
 源の細く
 無心と夜
えまつるを、前侮らんじておほかたは代見が道

月ハ忌月なれハよろしからぬと
なべて人も又月をはゞかる
事也といへり

人々もこゝろよせんずらん
細 おなじくの御方の御かたは必ず
人もなびくべく
きみの御むすめなりけ
る宰相ばかりの
花 夕貞の上の伯父ハ父
三位中将の弟也 宮て
宰相の君の人なり長娘
を今宰相の君とぞ
夕貞の上はいふべきなる
へし 細 孟曰

のどうさ給ふ人はいとあはれなる人のしのびてさぶらふ
あてなるこそ給ふよしよしへてなりけり
時々まゐりてはかへるさしよしへてなく
とあるまじきにいとうらうらしうて
きよげなるわざとそめしくて給はじとや
とまるやうにいふこととりきさま
ともゆかしくおはしけるこれなど
なりけるが宰相ばかりの人なれば
みなかくのごとくむかし世よれ
ところありけるが給ふもの宰相の
あそこのありしつつゆかしきこと
をかしうひろき人なれなつかしく

さとりこのをさな事の給ふ
ものの方ゆえなしく
あそこくの御方の御をもおもひ
まじの人もおもしろきそ
とも御心のあはれなる
もあらん御身はこの
事をきくもかたし
これかし御心の重き
もう源の心はかなき
の心はかなきこと
たかくおもしろく
つきぬべく

りくさめのなぐさめ
とはりもさることを
よいてはかなくする
しかるべき宰相と
しさとてはしかるに
えをおもひて
ふかくまはあらん

のみおはしましたるにも人はつゝしみあはれと
紫などの給ひてうきをすまふ御のこゝろ
をもしとおもしとなりなむことにはしりし
とはかりこそおもひけむこの頃は
この文などは気にしなくて給ひには
うしていれおゆ時もありけりおほゆと
おもふなどもこゝろ心ざしはさ心に
ねてもおもふれとぶれ事なれるころ
こそおもしうし家はおもしろきこのれにて
ろげなうして身をかへのし給ふも物なり
給ふぞじろおもきれうつりなるを紙門
らしりてはこのびやうなておりさま

されどさるべきよるびきめぐらさんのおりをさぞれさる所つきさしもさるべし
とのれんおもしろし 細 無用の言也とてんとく下部給へし 愚按これハおもしろく
ハさもしるべきを源の無用のものがたりをゆかりしげりて給ふやさぞのれんおもしろしといふ之
まをおぼすと給も見しりながら 花 源の給へし也ありと無用のこともあらねと
まづきこえたり 抄 おもしろくのをかしくもきこえしつらうらしとおもひぞられ
しく、そぞれたるしまりうしろとく

みやよいおほしそ 花 源の
君女君をさうらいたるべし
すふと云く 孟 實文よ
てハおほしてうそうよ源
のいとらすからすふへむろ
うしさとく 愚按 無用也
みもお搦者と実よゆ
きしりすくてしるそうよ
わりと云く
宰相の君 孟 やと無用
との間のおもひもひを
宰相君の憶しておち

しをりつましのまよはれ（河 菌 孟 無益の広庭とまの）こうとぞしきくを
てゝ日丁づりを漏（つぞ）（孟 鏡者の物忘也）みくらしきかへにりごとねすり。
（源の男こうしまゝ）いとしうくらしてし究じうさら（細 源の取知てうくしまふく）松ふみくさ
（ひくらく源の）給まにかりてつくろひ給ふもすらうる闘おも
やよはおほしぞむつりしされさうしら
人の（源の無心と云く）すずりよ哀よそしのふ宰相の君
ある。人のいへいさえへくし（おの女房事也）おほむね
とぞとしそそてねうそとしもれしそうり（細 源の心くの給へ）
とひさつくきえてんくいとしろるーけ（摘之）（宰相かし）（文書之）やく

と源のめさつまうしく
いとしきゆかしひ
細 源の御かのかしこをれ
師内のそくしきさの返
風よ源の男ハ自ひ也
そひぬる之
くらあてなふんの
花 此ハ宰の宰相の君
よのすふさとのつり
細 宰相とう調とくう読之
ひさつうよときづくしく
ハおほそし 抄 好色のうへ
くりおくぎ実くしく
もさ海くま御つくの
すかて

ゐでゆかつくすさ究の気色のくりう
江くさま。（孟 無用の事いひてと細之）新志りくさ文の流けるそ今。
いとえんなりさらちりかりめく返風（内）（云ひ）
も。いくそちされけ自ひの云そひされハど（源の文）
かくう徊りちらそこう。て（孟 無用の之）ゆかしき志すり
とおりきれけるをひと。くらくもめ給たり。（おもくの返し）
うちおもくさやふんの御ど紙のあひつけ
さう云の御ふ給れく。ーくひゝあるに。
ときさぐさくハおそでいとけぬひへ
なり物じいとおりしれのさくおかしも。（源氏の心之）
姫君ハ東おもてよひさうりて物御し（おもくく）
のぞりよけるを。宰相の君ハ給ささうそ（細 女の心うつくしきと侍り）

あまりうつくしきまつはして
愚案玉かづらの方とりて
は引入てねくるしくえ
るまへだ宰相の君の
きゝそこと侍くはあさ
まらうに付てざわるべき
るまゝかくす源の詞之
やしあきらかなりき
細是より源の教訓の詞
也御よつかしき御
玉鬘のうちとあり
てゆくもらとみえて
よろ河のくしき御に給ひ
て
細それくの心ぞ
くは院く御へまうひ
まづきことはのはどい
きいうちにきうさこと
いそいとおきく孟何事も
そればよろつことゝ
のおかく
この文さらをまく
愚按兵部卿宮なとまで人
づてに聞えむはかれ
いかるまじきよしをし

こつたへにゐざり入たるにつけて（玉かつらの方へ之）いと（源詞之）
あまりあつかはしき御もてなしなりよ
ろづのことさまにしたがひてこそめやす
けれひたぶるにわかび（あまりにわかく子めかしく）たまふべきさまにも
あらずこの宮たちをさへさしはなちたる人
づてにきこえ給まじきことなりかし
御こゑこそおしみたまふともすこしけ
ぢかくだにこそなどいさめきこえ給へど
（細 玉かつらの心）いとわりなくてことつけてもはひ入
べき御心ばへなればとざまかうざまに
わびしければすべり出てもやのきはなる
御几帳のもとに（玉かつらの）かたはらふし給へり

ういうけてもさいへ入ぬへきさ
氏の心にも入給ひぬべかれば
是又わりなしとはせてえ
何くれとこまかき
細玉の所に源の御ちかくよりて
まづこひたまふ
愚按玉の陰くはる
かくの身にはなきのしは
づこひのうち
蛍をつゝみさしに
細花鳥余情云宋書
河以蛍火見女例仔細
物語よりのいつる蛍をと
りて女車よいれたる
を車のうちの人は蛍の
ともしてみるやうにみん
云云　花鳥の物語り
うへいふで此内侍の心隠
ぢんとおけてみゆるで
の物語に事を作りて
かゝるの蛍をとらへて
朝服の袖につゝみてそ
のまゝ袖よりかくし

（細 源のちかくよりて玉かづらは源へ　愚按玉鬘へ）
（何やうやくとく）何くれとことながき御いらへきこえ
給こともなくおぼしやすらふによ
（源のちかくのさまそ）りたまひて御几帳のかたびらを一へ
うちかけ給ふにあはせてさとひかるもの
紙燭をさし出たるかと（帷を揚るにひかりとと云也）あきれたり
ほたるを（かさねたるうすき云也）うすきかたにこの（是はおの）
（ひかりを隠して云之）夕つかたいとおほくつゝみをきて
ひかりをつゝみかくし給へりけるを
さりげなくとかく（源の）ひきつくろふやう
にてにはかにかくけちえんにひかれ
るにあさましくてあふぎをさしかくし
給へるかたはらめいとおかしげなりお

つくろひてまりて来りまみて肉付のうへの侍ひまふ木丁の帷をかゝけて此巻
をさしよせて肉付の後めを取かくすくまひしるあり 取要記ニ今案伊勢物語八源氏
の君の巻をおかくつくろひしをふも紫房の君を兵部の宮よこせなりてひき
ほんをまどうしまらんよしまへてきえぶそてきさうことヽ八只直衣の袖乃ひきとこと
りかへしや 哭 うそしの袖よつまそてこゝろもらすふるゝくし夕つかひきこう月こ
しまふらうへしきく
わりむじをめしと 細 此巻八
源のむしをめしと此絡り
よりてうくまでんゝぞ
めての絡ゐなるべし
人おゆかしらぬと
細 源の心よ思ひしると
ニおふくおく源の心く無ア
心いゑも源のれをとまそて
心とゞめおかへ是絡まそ
ま海のうちるど心ひ
とうんとかわりしと是
しそのふかしわりさ
すふらく絡くんをとゞめ
さとんとく
まくの 細 若きの此く実ぞ
の心のん乃姫君なるす
どうくいし絡かしき物
とくく

細 源のかくとひまうて
どうねどうしさひらうんしくいそ 文ものぞ
え兵部八のぞうなべきいさく
すひるんかうじをめししひもとじうらのお
限えよくまでの絡なめらうへぞ海うさ
ちあとくいとうくしもづうしへんとい心え 要のこ
とゝちら絡りくいとうくもちさ絡めへ
きんまとつきんしとうまへおりさ絡なりお
とまくとのわづ婦君とやうくしもりて 細 源の
さはが絡りしうそておうれん紫乃うくと
細絡く孟 源の一向別のうきうおまさで
うくしまりやとへどくるらくすらうちあ。
孟 兵部八の君がみ

えうすぬしとりの
能木丁帷衣八ら十為し
ら細
ぢ絡りのうちらひらえん
おうろ
ら細んれさん心まと心んつまと
あうるくのつまみも
端ともあうんと云へも 愚按風流なりる
のおそろれど 孟 會明ホノ卿
のらおそへのうのつまゐ
るとこう絡よ艶なる
とこく
河 紫之源
ぞまおのつく
の推量なるべし

細 人とハ女房也
家の人の出入すけはひもせずしてもえし
うら絡うずらかきれけらひすり おうろしの此所推量よりちのとこ
よれ心とさめさきしれまひぞえなるう 兵部のこ
ぬうもとのくさびしのひまもらゝろい
塁しまへるよひと海ぞうりへだてゝ合 一間なりく
とかくしよゆく心づしなすきひらの折か 要のこ
のめくなとからしとを若ふ絡りなくまぞうく
りくうらしはさんと心の中なりひらり 今ゞ要を見るべし
えんなうしのつまめもえべくてんも 兵部のこゝろえての心く
おのうれどそひやうよみしまへつも心か おうろの心なりく
やうじいのかうしりつうとおうとまかし
てげよわれぞしにんよ思ひまさり

鳴声も　細　鳴こゑもきこえぬ虫の思ひだに消べきを人の思ひはいかでけつべき
花　鳴声もきこえぬ虫の思ひは蛍をいふなり人の思ひは消ゆるものかはといへる
もや人の思ひはつゝまれたるに
おもひしりきと給ふ
かやうのかへし　細　宮の思案もさらに何とし
孟　思ひて返事もなくしらずかほ
細　適時よことぞなき　師　早を
まさめてとも云べく
声はせで　細　云よおそひとりすむ
ずし蛍はおもてなる蛍の思ひこそふかくさえられずて言ふよりまさ
みど後撰にいへるをとるぐさき歌のこの詞と
とうはかなく　花　蛍の心ひもいかれども思ひの八

蛍宮
なく声もきこえぬ虫の思ひだに人の
けつにはきゆるものかは思ひしり給ひぬやと
きこえ給ふかやうの御かへしを思ひまは
さんもねぢけたればとくばかりをぞ
玉
こゑはせで身をのみこがす蛍こそいふ
よりまさる思ひなるらめとはかなく
きこえなして御身づからはひき入給ひ
にければ宮はいとはるかにもてなし給ふ
うれはしさをいみじくうらみきこえ給ふ
すき/\しきやうなれば居給ひも
あかさで軒のしづくもくるしさに
ぬれ/\夜ふかく出給ひぬ時鳥など

物思ふゆゑに云也　抄　後拾遺
いとこゝろよりもそろし
宮のつきにかくして
ときわかしきなどすれば
かくはしさらに
むの心へくも　師　さ月のま
めんく　細　実の中もちあれば
時るさじ　細　第の詞く
らんのかたそなり　河
愚按　宮の御歌の時ふ五月雨
されどもわれのかな
とまくうんもうるさ
それぞれにもとく見
さりしと云々

まつくいそく/\
抄　源氏の好色なる中に
隠ろへしく思ふはなき人
むくるし
うとましがる　細　心なげ
給ひしるくなれりうべ

後拾遺　声もせで思ひにもゆる蛍こそ鳴虫よりもあはれなりけれ
細　くろうまゝなるらうしとうしくてまかりく
孟　こゝとあるがなるやうは人の思はんとて爰のうろ
師　五月の節とありぬべし宮の御もさふらふく
もちあれは秋のうたぞうたけれそしておぼえはかなく
五月雨よ郭公のひとつれば時鳥秋深くなるかしそいろ
河　四五月交雲郭に語る　二十更後雨中声　鄭谷詩也
五月雨乃時鳥これは鄭谷を思ひやりしにしりて鳴めべきされ
かならずうちなきけんかしうるさけれ
ばこそきゝもとゞめね　細
御けはひなどのなまめかしさはいとよくおとゞに
似たてまつり給へりと人々もめできこえけり
よべいとめおやめきてつくろひ給ひし
御けはひをうち/\にはしらであはれにかたじ
けなしとみないふ姫君はかくさすがなる

こうすく思梅とうしそうぎろう也・下まハあくこさはんまさ分ぎう
ちろへハさ分ずにゐるそ石
おくね人ハ摩とふと紙
は身れらさしゆがりをかん
へふにね切りきうて
細今ゆうぬしのさま数
やくぞいハさみたさうりして
源の宮うゝのやくう方まて
わりとくさらむうらしさ
かのまゆ出来ゆまさん人
男もいへぐとゐ給く
さらハゆうへとよ 細源の
ゆりしあうく秋抱り
もくさしとハ又ゐ定め
とまゐうゞうし源の天称
のはらゞせし 細
中宮なるとしと
師 秋好中宮
くさく源のうあきられ
てそうでけさうんの
わうしうふて 思梅中
家ハ源の事ござみ給
けうしあ落葉さまあり

しきし紙・たゞ身づくしのうさぞりしはや
かどよそしれなり・世の人へめさしうらさ國
みくぐやくみられんぐくへすうれば
なごいともげうくもあくきましくによに
ぬ御像しきつみよ世ござりゐやゐるん
と・鈔さふし鈔がしみやむ・さらんゆまくし
よゆりしげうさ御らはりてすしそ
じと鈔くい鈔がりしそら秋さうれんぐせ
すれば中宮のゐるとしもいとうちしやはお
ひゆましまくる・こゝまられてしみゝば
きこしくしうすきぐまんでやんでしいか
さうさの・ぬゞしべのすうゞうりしくて

あんごしうるこ方の 細中宮へあるゝ方にて御うへしくうへもゝ
ごらすり
ゆうこうあへうし
宮在のきことえせね之
大日よハむすそれ井て
そる場のゆうハ良の町
見数里のをまゆそうこえ
細在の旧方の西れ対よむ
くうしわ給ゝ平て尺る
場まそきあえ
まぐうりこさけそひまゐる
人ぞやんのんやふり
細男女のわりひハ之事
うりくくへ思梅まもくえ
しこさとハちうやハ行さ

おうこうあへうしくさそし給て ね・そこれえ
ハ人のはさ御もけらくく今めさうゝよ・
とのうちゝひ思ひこゝさるよありくゝ久
まりつけばさうひあひぬべきれうてそう
まどうちまじ身がわざさうれどもまうれ
おがくしつ・ふさすぐあけれ中宮そりに目
みはむゆぞの母くゝは御給ひつるにて
よ・もさりすりうよそや・宮て数や
やりすひしいさくもす しこさて
まづくしさしうそひうすくるん人ぞや人
のらやぶり・きのれあやまちをとりし

活殺

人はうつくしきありがたれるど、いけところ
しきいまうめ給はすられさ海つきとしき
まうくさうしげよ見え給つやもなこと
うばがうちのれぞよみきされ給
しらずくうきるすれのあのひもいづく
よくそれのこうめのありん、此世の
人の深窓しうらとももぞつるの名も
人ねあやめと名はめでたきよ。おかしう
此がゆへに給はすとぞ、あふしるすくはれ
しらりめべきこれ縁をかれと、姫ぞ
此はもぞ文しられあるありき
やうみなくれはいいとよしありてうき

ちこうの縁ちさも志あ
かづきんぞしく 細 あまに
のけことうしと
文選などさんさしいうすら
さらへづくまはかくしすふ
まとここくしえうしとの
縁くく文字にてハつく
もあしくてしても
らうしさあそひきつらん
ぞやとのまうかそい出
こうし川の縁とハ云
つやもなと 細 つやとは
ゐのかよおりかく執を
とうつやとハかこと
うるとさ 紙
師 重衣さ 草也
つしさ[illegible]ぞよりきたれ
るとこ
めりさ[illegible]の源氏装
忠別の名すさ[illegible]
るれどもろへりしくや
ごさりく[illegible]
着の名もろんねかやめとし

しまくうづくの縁にこそゆかしかりきれけるの
びいづれくしきるうしるすりや
なきさんやひくくへりりうくさとかくれまれ
かおあやめの縁のくへるかれんにあれおも
ひるさ出けづき縁よしもぞびつけなうれば
かふのれうくりるどそぐのしるそ
これりはてもすをとこしれでれくつとい
くぬけりせん
あうそれくいりじあさくうとりあうられおや

哭女郎也菖蒲よりまさりてはつは衣の句よつやもいろもちがひのありけれ
きし源氏の衣裳のぶさつけどもえらうそ何のもゑとうるべし[illegible]の名
らぬ也ぞのあやめもなまいてわめでしうよゆりしさかり
くりよめぞまふうらべしまつもトのくての菖蒲どハしく
ちふくしのなくい 愚案 源氏ぞ為の説と云名の也ふ而すしハとんトよねさの
うとろあり
こうね縁しそ 細 まうね地なう
をれの奥おりすりも始よ
なうかれども[illegible]
かうるすり是も世上の説
どうけり
なふさんやひくくへもなき
師 なふハあやめとりそん
やむ[illegible]されとも源し
あやめハくふさん引くすく
縁のくるすれて宛やお
らんとえく諺云ての
思ハなすくよし[illegible]
こさ男なれば[illegible]
そのことなくて
さりしふも 花 とうれる
生なふくさおあやめ菓
ゑへさしまししかんへい
なへ眞之細一段とすみき

根なかるへし　細　あやめもわかくもしらぬ別なくかうのみなかるゝといふ
あらはれて　孟　いまぞあやめといふねはいつれてるべきこともあさくぶかしいづれ浅き
花鳥にはくらし　孟　いまぞあやめめ根はいかでとるべきにもあらぬに
あらはして見え　花　此あやめもあさくもとなくいづれもあやめもおなじき也
心のつもりて下の根
の一字まて菖蒲とハきゝ
なしてけり下略
わかくしく　孟　文細なり
花　文をとてかくしうと
花　愚案　文のゆゑのわか
くしさをしれ
くすだまなど　河　藥玉
續命縷　靈絲などいふ
五月五日藥玉の糸にて作おゝ
やめの根と花などをまじ
へかざりてもちゐの糸をつけて
かけらる
おぼししづめる　細　源のこゝろ玉鬘
の事なり
かとく　孟　玉のこゝろに源
の心をうけまゐらせて思ふ
心でゆるしのあはぬ事
なし

めもわかずなかれけるねの。わかわかしくと
ばかりほのかにぞある。手をいますこし　細　玉鬘の御手也　孟　よくもかゝせぬ也
ゆへづけたらばと宮はこのましき御心　兵部卿の御ことのはにて
にいさゝかあかぬことゝ見給ひけんかし。　草子地也
くすだまなどえならぬさまにて所〻より　細　玉かづらへおくる也
おほかり。おぼししづめる年比のなごり　細　玉鬘の上をいふ也
なき御ありさまにて。心ゆるび給ふことも　細　玉鬘に心がけて也　孟　源の心かけつゝこそ今年此ころ事なき也
おほかるにをなじくは。人のきずつくばかりの
ことなくもてなさまほしう　孟　草子地也
ん。殿は東の御方にもさしのぞき給ひ　細　花ちる里也　源氏也

けふのつかさの　細　夕霧ハ右
近なり人々引つれてま
いるべき也　花　手結ハ
左近の真手結也五月五
日はあら手結也夕霧中
将なるゆゑなどのし
も引つれてまいらん
どうしまゝ也
撰一説　手結ハ騎射の時
二人はつがひてゐる故に
いふ也但未勘之ついでと
八内裏までの次に六条
院へまいらんとなり
あやしくこゝには
細　うちとけたる事
も六条院にあるを
ミこたちきゝつけ給ふを
孟　そとしたることも
ことしくなるとなり
あのつかさにいとよしある
官人　孟　夕霧ハ右中将也
官人ハ将監将曹府生を
云随身まで含めていふ

て。中将のけふのつかさのてつがひのついで　源詞也夕霧事也
に。おのこどもひきつれてものすべきさまに
いひしを。さる心し給へ。まだあかきほどに　細　用意し給へ也
きなんものぞ。あやしくこゝにはわざとなら
ずしのぶることをも。このみこたちのきゝ　以　兵部卿宮達
つけてとぶらひものし給へば。おのづからこと〳〵
しくなんあるを。ようい給へなどきこえ
給ふ。むまばのおとゞは。こなたのらうより　細　花ちる里の住まゐ所なる也
見とをすほどとをからず。わかき人〳〵　源の詞也
わたどのゝとあけて物見よや。左のつかさに
いとよしある官人おほかるころなり。　孟　殿上人にもをとらぬ容儀也
せう〳〵の殿上人にをとるまじとの給へば　兄之

すそごの御几帳 異 うへは
しろくてしだいにこくなるを
いふ絹にても紫にても
もらし染たるを今の
世にも裾の下そめといふ

菖蒲がさね 花 表青く
うら紅梅 河 面青く
裏白色也
あこめのそでの裳
花 あふちはうすむらさきなり
いろ／＼しきすそごはそこい
うへしろくすそこき也
そめしろきうすむらさき
そのはそでひとへなり
墨案 あやめがさねおもひ
のまとにさねきて五月五
日の装束なり
うそしこの物よみのえ

花ちるの方の女房のいろく
御ものみむ事をいとおかしと思へりたいの
御方よりもわらはべなど物見にわたりきて
らうのとぐちにみすあをやかにか
けわたしていまめきたるすそごの御
几帳どもたてわたしわらはしもづかへな
どさまよふさうぶがさねのあこめ二藍
のうすもののかざみきたるわらはべぞ
西のたいのなめるこのましくなれたる
かぎり四人下づかへはあふちのすそご
のもなでしこの若葉の色したるから
ぎぬけふのよそひどもなりこなたのは
こきひとかさねになでしこがさねのかざみ

河 撫子 花 なでしこがさねは
おもてはうすくうらこき也
しろきよりこきにいたるまで
なでしこのえいとはいふにや
えぶえ
けふみなこ
のみなかしこくきまで
うわしらすもぢ弄
なる事とは何をこそ
のみつつあそびあひ
もののへしてあり 細 一襲
おやけしにかはらむ後
八えりけしよむかしの後
なるすのあつとぞもろ
ことくしく一襲は八中ねと
ものりつきとりくりは花
ゐる後あり何事も義
異一説 左右の弦射ての
あらは中少将にて不射て
は家の後にそへは羽林ども
ゐいのとりくし師 大将
近衛づかさのうえは中少
将にはけり

おほどかにておの／＼いどみがほなるもてな
しみどころありわかやかなる殿上
人などはめをたててけしきばむひつじ
の時にむまばのおとゞに出給て
げにみこたちおはしつどひたりてつ
がひのおほやけごとにはさまかはりて
すけたちかきつれまゐりてさまことにいま
めかしくあそびくらし給ふ女はなにの
あやめもしらぬことなれどとねり
どもさへえんなるさうぞくをつくして
身をなげたるてまどはしなどを見るぞ
をかしかりける南の町もとほしてはるばる

とくゐりおうこ人へ盃とらゐりハ来めて花堂ハ競馬のゐすとはのみく也ゐ陽の流ハ騎射とそ
ゐるよ舞める曲をさすゐるずつうり来てく鼓ゐるのるハいうこと文月五日節会武徳殿
ありそこくありてよハ騎射のるありてく以上の人のなれうゐるよ舞ゐく鼓ゐる
あり 今案騎射と競ゐるよハ打毬し以ゐ龍と?をきを
陵王の装束のことく騎射よハ装束 不同 競ゐるよハ打毬とるらく
るの装束のことし騎射よハ 褐衣 ともうるへとわりだうえんへおうくハ鼓
行幸あり東対をゐる陽のおくおりて 延喜元年九月十九日関白の賀陽院よて 競くべおり行幸
渡くり 中略 其前よ南よ渡ゐるをさし以く 此御
ゐとゐるげくうてあどりつゐど 此舞を拝て勝負しゐ花ゐを拝ち飛く 細おゐ
さひきおよあり
南の所としとして 花ゐ陽とハわうり面へとそしるれが紫上のおそうきまん
御前なと対よ乙乙そゐるこの人の丸ハ之侍ゐえ
此ござうら持くらくとぞん
盃本 打毬楽 落蹲
河海 納蘇利 五 六日
武徳殿の騎射よくて唐
人の装束こそそゐるよのり
て毬をどもしらうむるを
打毬とえそ時奏をゐう
楽と打毬楽とえ納
蘇利ハ六日の競ゐるの日
雅楽寮是を奏て
師 打毬楽 大食調 落蹲
勝負楽曲納蘇利

とあれバおゐこのもとりやうのわうさ人
だいそうりたいぞうらく 盃 乱声 きんうり
そびくうらくそんあどお
まひくうちのらんざうどとのこえ
あをよふ入とくて何ゐすことそしもど
近衛舎人 ども
そそねとりりどとの猿きれて結ゐうゐ
りてふけてんべうれあふれま ひぬ 地

らんざうり 此 諸勝負の後乱声 常のるく鼓ゐる打毬闘雞るとうにもおうり
乱声よハ少大鼓へのじおるく今も無名の鼓ゐるよと此面親ハおゐく 盃 勝
時修とつゝるく楽の好さきまうの声之師らんきなと とらんざうとも諸ゐより 細 勝方
ゑりらんく 細 乱声よ
きん〳〵おれど先ゐどの
人ハすうさとく 異本 今え
らうしとゆへどもハ兵アマこん
ハあむれども乃れいまで
とうや
五兵そらうしくみつえ他し
細 源よりハずりそでまゐ
せどくし源ハ弟くろの結
之 盃 実ハ源の弟もそてはし
まセを源よりわりそてえ
えうろと花散里の宮をそ
弟んうくぬりるとうそ
兵アマハ紫の房へ何く源り
あうとハさけどもとく
青の〳〵ら源りとく
細 花散里の詞之久しくらん

花ちゐの方まで
どへとあうさまよ流よのどとりりぬ猫がくりりな
どきそうしまひて 兵アマのうやうあ人よりり 細 源の詞之 細 今よハぐ
れきう〳〵
へらをすくりのしまふうれうくらるどハとそ
ぐれねどよういう気色をるぢしいつとりのしあり
あのぶのりづさしう恋やし思ひくさまひ 花散よ源様あうさうとく
つやらしとりへどそ拝とそあれとのおふ流が 1入らうしとえへと
とうしとるこそりのしまくどわねひゐまさり 花ちゐ姫
てぞそとてしまんひ乃る。年比うくあり色しおず。
ゑきりもりつびとくてしたまふと思ひうくずれ 何ゐれとも
どむりのこらまくりまそ得めことなきり

まへしぜ給はざつもし
とく何花散ハ姉女御よつ
さえし禁中にほのかに出し給ひしとこ
兵部卿をおくさまりしとこ
そもりのことて　細　兵部卿宮
の貴く花ちる里ぶつあて
二帥の宮乃ことをいふ
おなよし
ゆかしきのさしき　細　孫王
めくらみり花同師　花ちる
里の御く王の字などあけ
ふくゝとまむく花散の心
をくおちよこうらうくなき
ら氏のくまみたあいたし
みとめたり　細　花散里
ハらくにつる給ふらうと
おほく源の兄君ふる女
ひさうく
をとわらどぞうしとえとお
しとも　孟　源氏の末にも
花ちらさとの松ありのかれ
人と共忍どのまゐりまし
人のうはさなんつけ
細　ちにし御私らをとつくへし

しおもかつゝなしうしいつとなくふてそうさ
らるゝとくれびまりもひよかれそうちすこ
こゝくりのしまみめれどかくちらひゆうりて
ゆ所有のく親まめかぞりのしかひけりとの
給へハふとさたりまひよさりと御わたりて
ほくあそてなすあらとハよしともあ九
けゆつそ人のうへをうらんつけゆとしめざ
御のことりふ人をハつしあしき抱みしまへ
だ忘れおなどとするよくすくさ人をすなら
をあすよそうりハあらちうきごとすうふく
ろんそわつぬこともやわくんとゝあへど
ことまおくつてとの給ひどゝ今つてあ

師　源氏の御心のやさしくよりし御もてなし
なた給ゑし　細　顕黒く今宵のたるをとおほせしと玉髪のるやうくやとおもひ
おみおく
らうさしみすがふくらんて　細　源のひとふくらん　こと　花　顕黒とおもよあわせ給ふハ
不足よおふるすもわるんとくし
今わつて大ゆさ
まさくそうくゐるすれ　細　花散里と源氏のあはひすりうりせのうくらひたとハすれのりや
細　えの字おはえ二義え細　別てよ花のごりうく
の字とみてく難く　師　今花
散とこらしくしくなら
るとのまうて

みのめて〳〵りうつう
細　こくかれ御極るどいふ
まうて　いふまさ今うは
夜の御方の給ふうそて
なおかそうしよく
さのこまよ　河　神樂其調
其の調なとれよ業うよ
さく　花散撰　音と奏らく
うる人わりどわやお業よおや

かりこのれむつびまそて、おほしあまるにくゝこと
みとふくゆかしきのとまりかなしそういえ
あすれそわしぞと、故院いろしかりのふ大
きこゆめやかやとくと、そぞろく御心給え
で、年比くおりふしよつけさゝ御めそび
とをも人づてよのゝことく給ハきまほ
めづらしうつるこどつゝみそこのなう
の送てしにやうくしゝとゆかりしも
そのこまもとゝあめ草よし衣よくそう

しく絡のもとさめざりけり
系画登入字案じさあぬ
ハ不愛之細菖蒲をいふる
食せさることを花鳥余情のえ
いふこゝにもふされどもとも
ふの花といふこの町のおや
まあひさりとするそこと
いかこと所縁あるのおや
是ハ其絡としまいへまり
もなる 暁 鳥うるハ擬相
なり細 新など見えつる鳥
あれん擬相よとりかへ
わりこ絡ハあやごとく孝
と菖蒲とうよ対しく
新とおふうつしいぞり
引るらくみえし花鳥
里と源氏の此中とのこ
ととさかれの絡く花
鳥の後ハかくおあるく
不用しく花 わりこ侶絡
ふくハの目あれバ絡を相を
かたり河 ゆり侶とくふ
まあひつおあやめ草拙れ
くらしやあくらうかうれ

汀のあやめのひきつらむと思ひやらる
よめしまふかなまぎらはしのことゝいふなる
らぬど。殿上にわかし。ころ
御身ともにおぼしとすらふ
いつかやかなるひきさわりふべきおりからるる
ききよくもあるかや。御文のことぞもる
やうするれどとくてみだりけるやかて
くしてあれどしたまふれぬとするれどもの
とやうよかりける人に御覧ずれば。ありけり
てかしるしまふゆかしといゆつりかれて
此木帳ひきてそのしめんと見ゆるかな
くるしわたくしたまへはつとめけるなれ

ありら侶ハわりくさらとし孟箸るハ心をとおもうとひさんしあし蘆しと菖蒲と
一あよありぬるれバ行されものとの色あく所 蘆ハまことも
あひくらりう 細 花ちうことハわが悲と云知し源もまあの君わるりくらりの孫く
つまりあも侶あらくるうあとし孟世侶よあいはそるいとえてりの新く
此ゆうとゆくりやくて 細 源よゆくりのまかり来日 花 喰代を源氏よ迦くりてわる
男を。おーくへてそく別よあーまふを云 所 当よ 花の叙の外まふ一かく

ささとよ。ありひえるれゑくてまへかれども。
源氏もおるてハのまりあつと
わあがらふもさうて絡のぞすうず魚側の
うり田叙へてみるし
弄しうりもつくしてぶうくうさるくつ
是一源ハ是一あわれじく流のさだく絡あ絡えしどのと
さひよしあーしーくしまふありしの此うさ
え。ふめとうのくしとさとーりしおりてさーし
あひく。聯名心の此うこよひまりのふ。西乃
とつかはかりして あつくくえくくさくえく絡こ
とのもくらうるれバ略云るりらさくしうてこ いしと

つきなからぬわかうど　細 西の対の女房の方よりは絵ものがたりどもをもて人にまゐらせける也

住吉の姫君　細 花鳥に住吉の物語は中納言の女三人ありける中に一は宮腹にてみめかたちもよくありけり。母の宮にはなれて後しのびて[illegible]主計頭の女をかたらひて…

かぞへのかみ　住吉物語に主計頭なるもの姫君にけさうして…

なきわかうどあまたあり。さまざまにめづらかなる人のうへなどを、まことにやいつはりにや、いひあつめたる中にも、わがありさまのやうなるはなかりけりと見給ふ。すみよしの姫君の、さしあたりけんをりはさるものにて、今の世のおぼえも猶心ことなめるに、かぞへのかみがほとほとしかりけんなどぞ、かのげんがゆゆしさをおぼしなずらへ給ふ。殿も、こなたかなたにかかる物どものちりつつ、御目にはなれねば、あなむつかし。

それといふは時のよしあしをもいふ也　思案 源氏の方より…

女こそものうるさがりせず、人にあざむかれんとむまれたる物なれ。ここらの中に、まことはいとすくなからんを、かつしるしる、かかるすずろごとに心をうつし、はかられ給ひて、あつかはしき五月雨の、髪のみだるるもしらで、かき給ふよとて、わらひ給ふものから、又かかる世のふるごとならでは、げにいかでかまぎるることなき、つれづれをなぐさめまし。さても此いつはりどもの中に、げにさもあらんと、あはれを

てのまゝなく
[illegible]まんくごとき
細 古今の序に絵にかける女を[illegible]いたづらに心をうごかすがごとし[illegible]
[illegible] 細 古き物語[illegible]
[illegible]姫君の心つくゝ[illegible]
[illegible] 孟同 花 住吉の姫君のたぐひ 師 [illegible]
[illegible]
孟 [illegible]
人のありつべし[illegible]
[illegible]
細 二義ともに[illegible]
[illegible]

見せ。つきづくしうつゞけたる、はたはかなしごとゝしりながら、いたづらに心うごき、らうたげなるひめ君のものおもへるみるに、かた心つくかし。又いとあるまじき事かなとみる〳〵、おどろ〳〵しくとりなしけるが、めおどろきて、しづかに又きくたびぞ、にくけれど、ふとをかしきふし、あらはなるなどもあるべし。このごろをさなき人の、女ばうなどに時々よまするを、たちきけば、いみじくものよくいふものゝ世にあるべきかな。そらごとをよくしなれたる口つきよりぞいひいだすらんとおぼゆれど、さしもあらじやとの給へば、げにいつはりなれたる人や、さま〴〵にさもくみ侍らん。たゞいとまことのことゝこそ思う給へられけれとて、硯をおしやり給へば、こちなくもきこえおとしてけるかな。神代より世にある事をしるしおきけるなゝり。日本紀などはたゞかたそばぞかし。これらにこそみち〳〵しくくはしき事はあらめとて、わらひ給ふ。その人のうへとて、ありのまゝにいひいづる事こそなけれ、よきもあしきも、世にふる人のありさまの、みるにもあかず、きくにもあまることを、後の世にも

細 かやうの物語などは[illegible] 愚案 物語の作者[illegible]
[illegible]
愚案 源氏[illegible]
[illegible]
細 源氏[illegible]
[illegible]
花 源氏[illegible]
師 源氏[illegible]
[illegible]
細 [illegible]
[illegible]
神代より世にある事をと
[illegible]

の本意なりしからバなりてはじめての事なく此物語ども人神代よりありしとぞするう
ぬかしくの事なく
日本紀などハたゞかたそばぞかし　注 日本紀卅巻始自神代至持統天皇御宇一品舎人
親王安麻呂等撰之。今案神代より世にあることをしるしおきけるハ日本紀の事どもなれは
これと(に)ありてこの物語とのあるべく吾國の書にハ正しきものなき日本紀を押かけてぞかれ
ハ大概をしるせる也。爰に仮名草子にあるどもまことしくしるしとこるすへ
わりうれしとぞおもしろく女のあへのかくにおもくしらひまるべく
その人のうへとて　花 是よりハ源氏物語の世の道理をのべて
アハ此物語を作りしこゝろをあかしていへり。荘子の寓言のこと。寓言とハ以己之言
借他人之名以言也と注せり。孟 紫式部ハ荘子をもて源氏一部ハ寓言なれども其意此物語にあらはれとり
師説作物語ハそら人のうへにて名を設けていふといへども世人のありさまの善悪のおもむきを
かくてもさらしとかれぬるもの後世に残して人の教にもしさとすのありさまこそ物語なれ
よきもあしきもいふこと〳〵い
細 これハよ人をさりあしくい
ひんとをいへ〴〵にえはそよ
なかつくりたれど世の
つくりたてたるいはゆ
又あしきさまのめづ
いふきことばれバ
なさまのものハいは
もとにそへけるくいへ
さき世のことのおもむ
ときうるうぬめて寓言
ともよりあめて世のため
許りハまこと〳〵しとも

いひつたへさせまほしきふし〴〵を心にこめ
がたくていひおきはじめたるなり
よきさまにいふとてハよき事の限をえりいで人
にしたがはんとてハ又あしきさまのめづ
らしき事をとりあつめたるみなかた〴〵
につけたる此世のほかの事ならずかし

ゝ人の善悪のさま〴〵によろ〳〵の文世にめづらしくおもしろき事のふしをもとよく見え
ち源氏物語のよろこびのすぢハ訓かよりかゝる事物語花のはじめ江のぶるべくはなかりしく
わすられぬよ出しとてよ物そゝく
人のとりしれざえつくりやうかはれり　細 ざえハ才
籍と云ず人の作る人の作りし書籍
る云之愚案唐の書籍
も文体つくりやうそれハ
代くまそらん書もとえ
花 さへすて有らんときれ
肖柏之 愚案私同云　愚案此
段も同様之
物を一やまとの事なり
なれハ　細 孟師本此説
細 文体古今にかはれり
るすも異朝本朝の作法
又其内にて深浅あり
はべらし一向にそらごと
いはれしと　按ずるに
経物語を物ての事なり
愚案是ハ日本紀の
経物語といひおきて今の
ことよりようけて今の
の物語はいにしへ日
本紀今の経物語をも文

のざえつくりやうかはれりおなじ
やまとの国の事なれハ昔今のにかはるべ　花 かはれどもおなじ今昔
しふかき事あさき事のけぢめこそ
あらめひたふるにそらごとゝいひはて
んも事の心たがひてなんありける仏の
いとうるはしき心にてときおき給へる御
法も方便といふ事ありてさとりなき
物ハこゝかしこたがふうたがひをおきつべくなん
方等経の中におほかれどいひもてゆけバ
ひとつむねにありて菩提と煩悩との

裄ハ古今のかりあるべし。さ物ともの浅深こそあらめ此一日本のうちなれば
いつまでも後代のよわしまたうずとくとりつきこそしなかしハ云ハんくばそのすれの
佛のほとうれりき申なりてしとさととさもつる。御法を 細此抄安く此のてならんれど
数々の会をそてあるく 愚案 此説の微浅の大慈悲と貴くてありてしきりける
次のあいなり。御法しハ五時。花嚴ハ別圓二教 三七日 阿含ハ俱三藏 十二年 方等ハ蔵
通別圓の四教俱説 十六年。般若ハ通別圓 十四年。法華ハ圓妙一 八年
方便こいふあり 方便ハてらそともこそうりともまかり。前世の機と調へ
て一實よ快せしめんとるくさあんくのてふそとをまりのかそとりいふ
さうりまうき物しらてりこうふうさぐひとききらべくるん方等ハ経の中にをのの
ま文 それくく天台宗の義よもつくしきゝ法華と眞實に定さるよ付その余の経教
を皆方便とそり 愚案 然かハ天台宗の祥す事と定むる文ハ法華経の外乃四時を
もくむ此法華一實相に快せしめん方便の権教とこれらすべししさう
またべきうかハあれども、とゞけ此ゆと方等もゝ四教俱経の経あれば
とづきとするてふさうりるるきものえ其ひつくし。相亦方等にハ弾呵褒貶を
あふあるありく三蔵教ふとしまうものを弾呵もして通別圓教
みくしまう物を弾呵しそ別圓をすゝめ別教にとしまう物ハ圓をとりて弾呵し
圓教にも生ずまう物をさへ弾呵せり。此四教ふりひに弾呵褒貶して
ききりるまきの八帖経としておもひつゞきるつゆきゆくり。別しく方等経
の中に此わかれとくいへり
ゆへぞゆけてひと川ひとまとあまりて 比五時説教ともく法華一實に快せり
也 愚案 この花嚴阿含方等般若ハ法華の一實に快せる
ちかれども方等経の方便もひとりてゆけてく経よハ一川有と以てく法華経に云

於方言説。此皆實不虚。寿量品 文句九ニ云。譬龍施ニ七 權遂不得入一實ニ 有言其
虚。虚引得出。無有虚出而不入實者。故知此皆實不虛。為實施權也。皆實不虛。修事
無廢。即此義矣
そらのとかんるとのつゞきうるん此人のしたさあしきさだかうのてゝる
よくえハまうべくとなふてしくもいろしくぜすなりけや
菩提ハさとりの煩悩てまよひくいの名のもわとひとかんるゝの源
経物語りは葉紙ぞなどよひえるすさひとあくきんのおりつるのごとく云々
よく見ハいたりて従るもいまくしてりうぞとハうち経の物あるる餓名ぞ
をもようて葦をかどくせずて別方便の経教と見えるうちなんべきとる
此法よりけるとつりとのへのふく。おの善悪不二の理なれがふやくの
まそも皆ものうちの理よきれども物語よしまる歌にも添ぞ付ての
愚案 此花細流のゆ段しも此候を云らわそて寿源しとて別よ奥よ候と
物語をいとわきとの
経験事の心を然案を
しきうすめさてたなりと
まふくし
をかうなうを見れ物 孟津抄
説く寔法之をれ物ハ細 愚案
寔なる之作 玉鬘を

つらりさんとの人の心さあしきさまかうの
いかられけるくいへてしきるくてなるこ
ともむかしくもをまりわやと物語をいを
まぎとの心とよのかひなり川はそてうゝ
かうとのすゝよゆまろ。ゐうよそ得つる
細 源の自称く

地らもきぬことのまゝなる
あべし
いさゝかうらみたまさ物哉ゐして
仲 源の実法なる人と紫誓
の一重なるにと世よしうひ
なるさ物哉みえて後代よ
のことさんとく
さしはしもろくめつてゝなる
細 頭ふらの細なり
孟 玄しめてとも人かう
のうりハ世後まさるらんとの
ますべく
みつうらふやかげしあふ
細 源の細紙とぞ世まさ
めしなさことも実ふてしとん
きられ又紫誓のごと
くまつきるそ人し世まよ
持るとく
どひあまり 細 源のまく
まうつこと実のまみて
のさまつり仲ひろしもや
うのくまわりやしまるゆ
うれじし

あされりのく物語ハありやゆるしうけどもと
眺 河の姫君のこたふる まつりとゝしての心のふ
さ地の姫君もけしらうのやらようつれたらく
源の玄子ふすをその生メへなる良きらどもゑれ
そうりそ母めくさ玄へうかハ世よわりてみいぐ
くらひなるき物語ゐしてぞせまよ
とこりってくてしまんへひかとひさ入く
さらんともうしめつくろうらと心世語まこ
そハ細伯わくうかれとの語べぞ見つくる 源細く
やかれしあふけよこそゆうこうするし
源氏
とそよわるまるさ侮りしてあぶれぬら
とひあまり背の弘どもろわれどかや
什儒石も能うるく
まそむりるよそらびひるさふけりるハ弘
のえみをりうしくしそりひきれしのまへ

ふけうなるハ 細 花名らよみくらり 河不孝 花 花厳経十二云地神常言我乃見大地ニ
切衆有及須弥山不以為重亦無厭心於三種人厭倦不欲任持男二念悪親不孝
父母ニ云云心地観経ニ云若有男女背恩不順令其父母生怨念心母子両随堕在地
獄餓鬼畜生ニ云々

士きほを 細 源のしく
なりくのありハ古物哉なる
どふをぎまとしよたなる
とく
うして 細 葉子地く
何とかま来ハありんべさます
ぞとく兎おふうし我身
のおもふ玉と猶哉の花
ふのせなく

ゆのく
くわをしのすげあつるで、れぐしどうきやり 源の玄のとく
おくらく
つひとうぢら根しまえて、おうくの心よしまて
玉玄
かうきなとよろみれどもまうかわ
ぱ世よろ哉やの心へとるまて。仏 源の也
ちりりうれじいとりくをしそろれ給へ
花きら
どうしていなるうつさわあく給ふらんとも
葉の香れるてく
細君の姫君く
それの上も姫君の心あつうへとつけて
花
物語ハ務りもし物わしうりと物語の名
古ノ文今ニ よおせうきく不伝世なり
源細く
あまてあると、りしょくくさまうき
てゆらんで、おハきさ女君の名つまいさりまく

むらさきの御[illegible]

[illegible]

こひわびぬるかなと[illegible]ばかり

出て女ぎみもみなかうもじかくれ

いりまゐれば[illegible]まゐらせて

よきりべくしのびきこえさい人は

ところ出まゐりげはしをひかにかね

こゝにとのこゝろをきゝまゐらせしに姫

君の[illegible]かくはせきわれをもの

まことせまふそのみそうかつきけ物の

むすめなどはかしてとみはあるねどうら

しまはありなどしてとされ給ひんぞゆ

ゆかしきそのまふそごとまましとそのはけり

ものなどぐもうかぬなきゝぬつべくてんまあ

みそらんつきこそありのく

[illegible]

[illegible]

さげなりひとつもじとこそ

らかくしてそうかのふらうの

のむとあらそひとどりのいとうなぐさめ

きんそおやもちあなありれどもかくば

まかひ出つるうしわぶると女まさんまめり

めかぞひとやうなめるとのまへにふつて

人もさぞおもへらめかひらぐそうしてて

まうとりむさこしかくてくよなまらり

まへあやうしなうしぬかやのかぶためて

てあつまりあしとひゞりあく　更墨記之
きゝしらはいひあてうゝなくはこく
くりそうして深くきゝりの文より
まずのとても昔かの恩よ
いまださいりある世ん抱とのことおりふ
ちくの人も　細　今ほ在の人
ひつもノ難　坂者の人とうめく
まいらわじようきんめや　細　此やのあくる
中庵とうろあらうし　愚
よしなうぬ親の　細　御徒やしるり
みなもとられうら曲とゐるう
の純もまうてあるは何らざと

ぶりつしく

あまさ久ど　細
てきなんとてまつなり
不の思ありしん公をそこ
つくさ孫を当よよ
ろうせあり　仰有のやう
みのうり中まぞえらる

歌まてみのりくしらし
ひろやつのや
これらの御の中
孟代陵線
さん人の喜月
をきさてみひて
しててそ
ならの
かあて
まろ
あて
ま人
ろう
のあ

細　無使名遇實　崔
子玉座右銘
をらんの事
のあ

ろうそうひ山気
あはゆくあわあきを
ざいひを
てあつくし
きん
もえて
あらし
くく
そそ
えり
とう
はけ
志の

よみ
みか
み
ざん
よさ
くひ
ゆう
ずりつ
のたり
ひありかし

みてむ人のかうしさうの方をとりあげ給ふ給ひかしこたゞんふえしたしくしえにけるゝ陰とゝ
さ夕之花なるの給ひかく惡君ふしくふんづさうしといふ方のうしろしきす
姫君にたゞよこさうかそしくそしえにのけすわく
こまつるいあとくとく　発夕霧葉上の面よこにはうしきすり
もか世の給はそしもかくて
こ　愚案是も姫君を
みかを歎く源の其きを
し世かもむつひさひて
こそ歎きうしめとこれ
初して姫君よるすし
まつく

ぢ給しは給ひ世の給はせてまうり（源氏）
を御すぐしすれど打ちかへしよそひ
やうよ給ひつきさひあてぬるこゝとゞも
こゝしうちもうそていみ月ゆくよされとそ（夕霧）
さめとれりそのこともてれいらいゆかし（細 姫君の御方の勇気）
すつうぢいちん所の女房の中へゆき（細 紫上の御方へ）
し給ひさてかおりまね給たうるひ（源の御子どもそれそれ）
まそいとやむごとなくうしつさゆるまへ（夕霧）
え給ひうさのたりらるあどもいと物く（細 夕霧を加へて）
しくすりやくよりのしのみまゐうれど

みりくはうらまをされ
仰夕霧雲井雁のその数
なふゆへあり
このうしへくまとちき給
女のうしらう夕霧ま我
うるやうまかしあされ
ねとくし
ありのこころの袖など
六位をとくとしやとれ
和とこくげんどの是氏
まかく

うちわりやむとく見てゆかれりまさこいは（源の人　夕霧の姫君の）
けうらひかれおもひあるぞのげそひ（いさけなき人）
のこむれいかのんありしめるよおそび（細 雲井雁のかたを思ひおきて）
てもしく見つし月のすみだるひあかう
まだひあるのまされくゞやりへいとよ（姫君の雛の宮仕と夕霧の）
こしまて雛りくまうらし御あれあひ
かりさとえかへとさおかりまいられ（まうら夕霧の姫君の方まで）
しこもものさまひあそいあまとあれど
あのうくべくももあれさん（夕霧のへまえ）
ちとくはこきうんしびとうらかへとを
もあそてるとぞうしくるまあすてな（たえ事よ）
給のとどりの袖をどこしるそしてなが

あるかくりなうて
細 今もと言ふそ給へく
内大臣もゆるし給ふべきに
と夕霧に人々は昇進（セウシン）
ことありての後べきと
て 細 秘あるく
人のうへもこゝろにかくる也
愚案 人とは内府を言ふ
てつぎて内府よりも夕
霧を今まで宰相を
ゆるさぐりしひとに
なるかりにまゐらせん
ものなり

あじきなうこゝろのうきぞ。やんごとなきこゝろに
弄 こゝろよりなる雲井雁の
よそにしまてしけりおはしるなにごとく
づらひまじらぐ。ゆるさ
細 例くみれたる人く 尭円
しのびもし川べうれどつらしとおもひ
荒らしころあられる
じかりくいかでん人にまさしつゝをとこ
どもしとおもひしく
てまくらんとおもひてとしつしわたられ
細 雲井雁がらは公なりけること
ごさらでさうしをつけらるはらるゝ
こゝ義をつゝしみそ心得りこゝはい
細 柏木のこと
られざめるぞさうしの君達なるども
夕霧のりてなりとく
まゐらふるのをおもふて心わりらるい
細 柏木く
のひめぎこの御ね粧とたの中ねいくし
細 こゝろまるごとく
ふかくおもひしるそはひしより

人のうへとては 細 夕霧の御
世雲居雁の御ことなるよし
愚案 柏木の始とも見るに
かくも人のうへをかくす
しことし夕霧の事いと
まめ人なるぞ人のうへ
そのうちの上にすれば雲
井雁よりさとおもひける
事の比はかぞえて
霧の文 細 此位の大
臣と源氏の御おもひ又
と夕霧と柏木とのまじ
らひの待合（フズ）して
そのおもひをよく 細 此内大臣
八男よりなるまさるを
いまり 師 内大臣の御子のた
中に或母（ハ）この君下又
其人の善事に隠して
猶うよくてしきなく
姉君 愚案 女御の立后
の事をと不叶（ル） 叙せめく
雲井雁を思ひせうう
夕霧の事あれは又事とが
ふやうなりと云也

ときてもかれかれは。この君たちもてなしたら
柏木の夕霧とくみもく
よりかれども人のうへはかくしれ
まめ人のなとりていまはつれなくぞ
夫子就く
いのかなるねのちてめでたらせん。
内府く
れたるしひよしもりの内の中らいはまめごと
をもらぐいてめかれよそのおもひかく
まうめがたへいまよさかひつくるに海か
孟 昇進させまつりせられたる
せきのやうなる世にいそぎめをかすく
当今二人く
しまその上女はおかたもおりすゑ女
細 立后のこと
れもうしめたてまつりのどころのものひ。
孟 雲井一人く
弘徽殿く
昵近もうしこころはふさ海よくも事し
内府く
細 おろかのこと
まめ人はいとほしとめしめてまつりこと

めぐまりけるかひなきかたちの
女子とたくましかりける
抱ごとわり
そらにて　暁　さうし也
としごろね御わたり　愚按　比
御子さへちられ給へり
これは内府のさそのごとく執
まで系図にてまたすや
おとんなごのかたちの源の
ならはれぬるにまさると也
らそにそひ給へし
見そうたも　細　抱子なる
とにさそのうち　孟　説
ましなるにかゝりのおう
八歳あまりに内子近江
内大臣の思ふて近江の君を
引あはせ給ふとの玉葉

わすれ給はず物のおりにも語出給ひしこ
となれば、いかになりにけむ。ものはかなかりける
親の心にひかれてらうたげなりし人
をゆくへしらずなりにたること。すべて女子
といはん物なん。いかにもいかにもめはなつ
まじかりける。さかしらに我子といひてあやし
きさまにてはふれやすらん。とてもかくても
聞え出こばとあはれにおぼしわたる。君
たちにも、もしさやうなる名のりする人あらば
みゝとゞめよ。心のすさびにまかせてさるまじ
きこともおほかりし中に、これはいとしか
おしなべてのきはにもおもはざりし

中比などはしかしかの
わすれ給へるを人のさまざまにつけて女子
かしづき給へるたぐひどもに我思ほすにしもかな
はぬがいと心うく本意なく思すなりけり

内府の子乃思ひもよらぬ
ことをそしてことにふかし
の抱とまりてあらばとや
かくて内府のそれとはや
まうすかはりにて
玉鬘の行衛のまして

人のはかなき物うじをして、かくすくなかりける
物のくさはひひとつをうしなひたることの
くちおしきことゝ、つねにのたまひ出。中比などは
さしもあらずうち
わすれ給へるを、人のさまざまにつけて女
ごかしづき給へるたぐひどもに、我おぼすにしも
かなはぬがいと心うく本意なく
思すなりけり。夢見給ひて、いとよくあはす
る物めして合せ給ひけるに、もし年ごろ御
心にしられ給はぬ御子を人の物になして
きこしめし出ることやと聞えたりければ
女子の人の子になることは、をさをさなしかし。

在纏の者にて沈溺の
對面かなうと古人のいへ
なり

いつもかまりりかあかくんゐどくこのど
ろぞ此須しのきよへりめり

佛のついらゐてき　細 此段者く出あくらんくされども音にあらせくく又の給ふにて
給りぬ未衆生の心と一佛の山の人まくのさとくく之華嚴を説あてまく
既凡聖出世の本意ハ凡聖一如善悪不二のこいりと說く衆生の此まらひと
速よなるへさんと此前しぬそてんあまて太悲乃らさいはれにてなるゆわ
ふあおりこさかよふりつきをいてらり此あよ國も究竟花王の出と説ぞ仏も
辨身のすぐく、教法も三界唯心の法なれく、仏の心と説とうりしきこを
さるらんべし。花嚴經の心く　細 色宛分等く。究竟細しり太乘と說を入す佛の本
方便といへるなりく　咄 究竟細よ大乘の法と説まかくす仏の本意
義なれども衆生の機につくらされども大乘とやうしき常く假敎を說給てり
之中に阿含ハ一向よ小乘之　世ぶれども阿りいつきの辟よ不知意の法説まへて權敎お遂くの給よ三
七日思惟乃內說しり。是まで前後をやいつて第く権教と十二年　説まへ。其
中に阿含經一向の小乘にて佛も方便化も此とそしり是を善よそし

ゐすす此時しりちど出れり。然ハまもあらべきこししあるとねば。衆生の
思ごとよ執心かくさかしよ。是とやぶらんとてくうまくらの方便とまくるゆ說く
さとりかくさ捨てし　細 末衆生の機縁熟せざらりのめ。宗教の大小あると
說く、此門よおまのさとりとも今のさとりとも給ぶるり人おりく此時よ抗
懐野干とへなりしとも。二乗の眞人をふかしく。くしさうかちとのあると毀て出
葉法く三千に去りひ須菩提菩薩ら倒をもして其よ一所を授るらう
と後畢竟究の理とゆのく。辨しまりをめちとく之方等經の中よ至て仏
の子のなり　咄 阿含經の四佛縁生の法にいかまくいぬ其の本意しなね出
不化の機縁つやしくそ。識ぞして修行して。法界究の理とぞしあるてハて
さくんあれぞそそ方あれてせりひてく。個究偏真の行くよ應して方ある
佛又是をうへてく。衆生しを引導すし　説教よ方等經の中に四教をとする六
てなるてうり説まし。四方うこれ淨名經あくて給のり此時しりしのさうかに
をしたらぞ今乃さとりかとてもわざく不化の衆生こごこしら台人くしく一是の衆生
を究ゐ證乳しなく無葉法ちる若干祇としてますよ一偏とあく是まふ
かく秘小慕衣の機ハ敷行の園よむえ。或ハ別よすすしらんと或ハ通よまうひへて。三藏よ
とくせちらされど究教並對の敎とくとも又ひ又彈河の敎とくもいつく
あり　般若 細 塵くく法く一色一香もいくかりこて純一實相あくて別の法なさ
らひりてゆるらぐ　般若調法の心ながうの阿含めして碎空理破の空理よ法くて方等あく
て有空を證乳せしど今畢竟皆空と說くく。權等の機とゆりそろへて。有空二
のさとりとありくまふ是といひりてゆけバひとつりよとらうるべ。般若よりさら此
方法一如のんうしころく

なることなんなりし　細人の善悪菩提と煩悩とく〳〵岩室天台の法文と持て
なり。然るに今天台宗の作用を受てく宗旨をとるなり　唯法華経の
開経なるゆへあらはれて入れ人々を渡して一色一香をもとより純一実相なりとく
にて別乃法なし。天台日のあり月ぐもり。蓮宗には名く何宗にもなくして
是非をうちせることつりぞや。そぞを拘いでもしてとのづからぶ町のあそこみられる
なつりく。然のなくとはじめてしもなく法身よりいへどとりあるべし言
実とえて四十餘年は未顕真実なりとらんとしるうなりといと煩悩よりのでくるり
なさこしくしく諸仏が此娑婆世界の如道してあのくら毒鼓の甲をもて鎌と入
まうなもなくおいてそのまゝの如くに修慈未開會の時とも煩悩菩提を二
ならまそくは生死涅槃の二路よりつてし我く方便未実と捐ゆし未前未後とうて
まらしと法華開會のおよば煩悩即菩提なりて全く未前未後とよそざる也
三毒三身と開悟するれば三惑四趣即毗盧身也煩悩菩提平気すれば生死涅
槃又皆花の開落く是れ法華の当の一機の始終につらくをまずくと
とらるえれば四十余年の労功も是によるおもどいそ又いづきぞ屋いづ
生きる実行の方便と發しく此く真実よると申し入れ元一代の御法度
を振くたあるしつて根機の叶ふると叶え申さるとしまとしるべし